

国引きジオパーク構想の申請内容変更について

1. 名称について

「国引きジオパーク」



「島根半島・宍道湖中海ジオパーク」

※変更理由

これまでの国引きジオパークの活動を通じて、「国引き」という名称は地元の皆さんを中心に愛着が高まっています。

一方で、全国から見ると「どこにあるのか?」「どこまでのエリアなのか?」という分かりづらさもあることから、名称について再検討し、変更することとしました。

2. テーマ（サブタイトル）について

「大地が生んだ国引き神話と人々の交流」



「出雲国風土記の自然と歴史に会う大地」

3. 協議会名称について

「国引きジオパーク推進協議会」



「島根半島・宍道湖中海（国引き）ジオパーク推進協議会」

※新たなジオパークが設立されたと誤解を与えないよう、またこれまでの活動の継続性を残すため、国引きの文字を括弧書きで残しました。

4. 日本ジオパークネットワークへの加盟申請書の変更について

上記1～3の変更に沿って申請書第1章の冒頭部分を別添のとおり変更しました。
変更前の各項目

- (1)出雲国風土記にみる国引き神話
- (2)出雲国風土記を自然科学でみる面白さ
- (3)環日本海域の古代の人々の交流と地質・地形の類似性
- (4)出雲国風土記と地形地質学が織りなすジオパーク構想

変更後の各項目

- (1)島根半島・宍道湖中海及び南部丘陵山地の地質地形学的背景
- (2)自然と歴史文化が融合したユニークな大地
- (3)環日本海域の古代の人々の交流
- (4)出雲国風土記と地形地質学が織りなすジオパーク構想

5. 今後の予定について

12月22日（金）日本ジオパーク委員会で合否が決定します。

第1章 申請地域について

1-1 申請地域の名称、テーマ、背景と考え方

名称は「島根半島・宍道湖中海ジオパーク (Shimane Peninsula and Shinjiko Nakaumi Estuary Geopark)」とし、「出雲国風土記の自然と歴史に出会う大地」を全体テーマに設定する。

島根半島・宍道湖中海ジオパーク構想（以下「本構想」という。）では、地質・地形遺産を基盤とし、この地域における古代の様相を精密に記録した出雲国風土記を模範としながら、大地に根づき現在まで続く歴史文化を織り交ぜた視点でジオパークの魅力・価値を次の世代へ、そして世界へと伝えていく。

(1) 島根半島・宍道湖中海及び南部丘陵山地の地質地形学的背景

島根半島と南部丘陵山地に広がる地域には、主に約 6,000～3,300 万年前の古第三紀に形成された花崗岩類と約 2,300～1,000 万年前の新第三系中新統が発達する。両地域の間には国内最大の連結汽水湖である宍道湖と中海が分布する。

① 山陰地域を代表する地質層序と日本海形成史への学術的貢献

古くより宍道褶曲帯と呼ばれてきた島根半島の地質学的意義が、最近の日本列島を取りまく地質情報のなかで一層価値が高まっている。島根半島の新統層序や産出化石が示す淡水成、汽水成、そして海成層への一連の変化は、日本海の拡大事変と関係すると考えられている。深海で起こった火山活動は広域にわたる熱水変質作用を伴い、黒鉱鉱床を形成した本邦のグリーンタフ変動帯の西端を特徴づける。南部丘陵山地における大規模な不整合は、西南日本本州弧の時計回り回転やフィリピン海プレートとの北北西移動の時期と重なる。また、島根半島の砂岩泥岩互層からなるタービダイト層や海底火山の噴出物は、山陰を代表する大規模な地質体として知られる。

南部丘陵山地である宍道湖南岸では、中期中新世の温暖期から冷温期へ移行する過程に形成された布志名層から動物化石が産出し、布志名動物群と呼ばれる。この地層を模式地として記載された新種の軟体動物化石は、現在までに 16 種を数える。

② 沖積平野の形成過程と宍道湖中海低地帯の特異性

この低地帯は、土砂供給元の中国山地のまさ（風化花崗岩）と大山・三瓶山の安山岩質火砕物、運搬者である斐伊川等の河川、そして河口の前面部に位置する器としての島根半島の三者が、平野と汽水湖の効果的な形成を導いた特異な発展過程を示す。塩分の異なる宍道湖と中海の湖水循環は、島根半島の東西約 70km におよぶ地形に規制され、それぞれ特有な生態系を形成する。



出雲平野上空から宍道湖方面を望む

③ 人為的平野の形成と人々のくらし

この地方特有の「たたら製鉄」による「かんな流し」は人為的な平野形成の要因となった。斐伊川によって運搬された「かんな流し」による花崗岩質粒子は、出雲平野の1/3を形成するまでとなり、日野川からの流出は弓ヶ浜半島を拡大させた。洪水時の流路を人為的に管理し平野の拡大に供した川違え（かわたがえ）は、斐伊川河口域の地形を特徴づける。平野の拡大は人々の生活の場として地域固有の文化を生んだ。築地松は、出雲平野の人々の生活と自然を語るうえで欠かせない日本を代表する景観となっている。

(2) 自然と歴史文化が融合したユニークな大地

『出雲国風土記』は、時の朝廷が各諸国へ向けて国の実情を報告するように命じた713年から、さらに20年もの歳月を経て733年に提出された。地名由来の伝承の他に、方位や計測距離を織り込んだ記述は、極めて詳細な現地調査に基づいていることが窺える。そして、驚くことに1,300年経った今でも出雲国の山河や神社は、『出雲国風土記』の往時を偲ぶことができる原風景として残っている。その『出雲国風土記』の意宇郡の冒頭に、「国引き神話」とも呼ばれる有名な詞章がある。

「八雲立つ出雲の国は、^{さぬの}狭布の^{わかくに}雅国なるかも。^{はつくにちさ}初国小く作らせり。
^{かれ}故、^{くにこ}作り縫はな」から始まり、「『^{くにこ}国来、^{くにこ}国来』と引き来縫へる国は、
^{こづ}去豆の^{おりたえ}折絶よりして、^{やほしねき}八穂米^{づき}支豆^{さづき}支（杵築）の御埼なり。かくて堅
め立てし^{かし}加志（杭）は、石見国と出雲国との堺なる、名は^{さひめ}佐比売山、
是なり。亦、持ち引ける^{その}綱は、^{その}菌の長浜、是なり。」（加藤義成『修訂出雲国風土記参究』から引用）と展開する。



『出雲国風土記』（日御碕神社本）
日御碕神社所蔵、島根県立古代
出雲歴史博物館写真提供

この詞章は、島根半島が天然の巨大な防壁となり、斐伊川水系の土砂を堰き止めて肥沃な平野を形成してきた歴史と、入り江や潟湖の形成が国土創生という観点で述べられている。いわゆる「国引きの詞章」は、花崗岩類を基盤とする中国山地、島根半島そして日本海へと俯瞰した大地の中で低地帯から半島へと広がる国土の耕作地の拡大を祝い、新羅や古志などとの環日本海交流が盛んな場所として土地を引く姿にたとえた。「河船のモソロモソロ（ゆっくり）に」と陸塊を綱で引く様子は、平野の拡大であり、島根半島を取り込んでいく自らの生活圏の拡大でもあった。国土創生の一大事業を詩歌風に語り尽くすこの詞章は、全国的にも、世界的にも、次代の人々に伝え継ぐべき価値をもっている。

(3) 環日本海域の古代の人々の交流

島根半島周辺の古代においては、宍道湖・中海及び「神門水海」のような潟湖が分布していた。こうした地勢の特徴は、朝鮮半島・九州北部から北陸以北に及ぶ環日本海地域の交流拠点にもなった。

例えば、出雲地域における弥生遺跡からは、朝鮮半島に由来する鉄器・青銅器・土器が数多く出土している。古墳時代にも朝鮮半島の陶質土器が出土し、出雲西隣の石見東部沿岸の遺跡からは7世紀頃の新羅産印花文土器も見つかっている。358本の銅剣が出土した荒神谷遺跡における青銅器原料は、朝鮮半島・中国華北地域から九州北部を経由してもたらされたものと考えられている。一方、韓国釜山

市にある東來遺跡（古墳時代前期）からは日本の土器が出土している。この他、九州北部産の銅矛・弥生土器や北陸産ヒスイの出土などもこうした地域と古代出雲との文物交流の一端を示している。



荒神谷遺跡から出土した 358 本の銅剣
(古代出雲歴史博物館展示)



楽浪系の硯片が出土した田和山遺跡

(4)『出雲国風土記』と地形地質学が織りなすジオパーク構想

『出雲国風土記』には、現在まで続く豊かな自然が余すところなく描かれ、その一つ一つが、今を生きる人々の暮らしにも宿っている。世界的に見ても歴史・神話と地形が一つになって存在し続けること自体が人類の遺産であると言える。

このような貴重な空間をタイムスリップして楽しみ、学んでもらおうというのが本構想である。海外の人も、国内の人も『出雲国風土記』を一読してからこの空間を巡ることで、より興味深い体験ができるものと考えている。その地質学的妙味は、まさに神の織りなす世界である。島根半島、宍道湖・中海低地帯に広がる出雲平野と古墳群、海食洞と黄泉の国、巨石に宿る神と断層などは、自然の造形を目前にして古代人と空間を共有できる大地の公園と言える。そして、歴史的にも考古学的にも自然科学的にも魅力に溢れており、日本を見つめ直す機会となることは間違いない。